福島大学大学院教職実践研究科

教職大学院便り

2025年8月5日発行　NO.10
編集：教職実践研究科１年 菊地

今回のテーマ「４月からの学び」

「あなたにとっての『探究』の定義は何ですか？」

この春、大学院に入学した私が、当初いただいた質問です。現職派遣として、現在は「探究的な学習を具現する中学校総合的な学習の時間の実践」というテーマで研究に取り組んでいます。昨年度、現場にいた頃の私は、「もっと探究的な学習の指導力を伸ばしたい」「生徒たちがもっと楽しいと思える総合的な学習にしたい」という強い思いを抱いていました。大学院での学びは、まさにこの思いに応えるものです。ここでは「教えてもらう」のではなく、「自分で深く考える」ことが求められます。これまで自分の中で「当たり前」と捉え、無意識に実践していたことすらも、「問い」の対象として見つめ直す日々です。一つひとつの事象に対し、なぜそうなのか、どうすればもっと良くなるのかと、解像度を上げていく。このプロセスこそが、私自身の「探究」そのものだと実感しています。

「あなたにとっての『探究』の定義は何ですか？」

大学院での日々を通して、この問いへの答えを探究し続けていきたいと思います。

授業デザインコース１年　中島史弥（現職派遣）

講義「学校経営の理論と実際」

とみおかアーカイブ
ミュージアム見学

富岡町教育長のご講話

講義「福島の学校と教育課題」
～富岡町のフィールドワークを通して～

富岡町でのフィールドワークに参加しました。富岡小・中学校や、とみおかアーカイブミュージアムの訪問、富岡町の武内雅之教育長のご講話などを通し、震災から14年が経過した富岡町や双葉郡の抱える教育課題を改めて見つめ直し、考える機会となりました。私が特に考えさせられたのは「つながることの大切さと難しさ」です。富岡町全体を見渡すと、住宅街や道路がきれいに整備され、復興が進んでいるように感じられました。しかし、富岡小・中学校の校長先生や武内教育長からは「もっと地域と学校がつながりたい」「もっと人々のつながりを作りたい」というお話がありました。私は、物理的な距離だけではなく、人々のつながりという目に見えない心の距離まで、震災によって失われてしまったのではないかと感じました。だからこそ、生活再建だけを復興と捉えるのではなく、人々のつながりを創り出すことこそが復興だと捉える意識を教師として忘れないでいたいと強く思いました。これは、富岡町だけではなく今後の私の教員人生においても大切にしていきたい思いの一つです。これから自分にどんなことができるかしっかりと考えていきたいです。

ミドルリーダー養成コース２年　久能彩香（現職派遣）

合同カンファレンスを通して

自身の研究について発表する大橋さん

「合同カンファレンス」は、教職実践科の先生方と学生全員が集まる会です。各回で内容が異なります。6月25日に開催された、今年度３回目の合同カンファレンスは、M1が４月からの研究について報告と相談をしました。

私は、同僚性の構築に対するミドルリーダーの関わりについて研究しています。教員が専門性を発揮しながら働く「個業」に近い職場環境では、同僚との協働が不可欠です。そうした協働なくしては、令和の時代を生きる子どもたちの育成や、複雑化する教育課題への対応は困難です。そのため、教職員が関わり合い、学校のビジョンに向かって協働するためには、職員間の橋渡し役となるミドルリーダーの存在が重要だと考えます。私は教職大学院に進学するまで、論文を作成したことはありませんでしたが、先日行われた合同カンファレンスで、大学の先生方から、論旨の立て方や、研究の視点について、貴重なご意見をいただくことができました。これからの二年間、研究について知らないことはたくさんありますが、カンファレンスを通して、自分の研究をより良い形にしていきたいと思います。

ミドル・リーダー養成コース１年　大橋矢（現職派遣）

授業実践―小学校２年生図工科「ふたりはなかよし」

７月は、図画工作科の研究をしている中村道子さん（授業デザインコース２年）の研究授業がありました。紙コップやプラスチックコップで作った作品に、プログラミング教材「MESH」で光や音をつけました。 子どもたちの創造性にどんな変化が見られたのか検討中です！

子どもの「こうしたい」に寄り添う中村さん

話し合う中で生まれたものを形にしていきます

教職大学院生の研究フィールドの変更について

現在、学校現場に籍をおいて、教職大学院で学修する院生は、福島大学近郊の市町村立の学校や附属学校を連携協力校とし、その学校で実習を行ったり、プロジェクト研究を行ったりしています。このことについて、令和8年度入学生からは、その実習・研究を連携協力校に加え原籍校（自校）でも行うことができるように変更します。※ 各自のテーマについて、自校でも研究を進めることができるようになります。今、ご自身が抱えている教育課題について、自校をフィールドの一つとして教職大学院で研究してみませんか？

※　ただし、実習・研究を原籍校だけで行うという想定はしておりません。

研究科長　宗形潤子

さらに詳しく知りたいときは…

入試情報

教職大学院案内

＜お問い合わせ＞
福島大学 人間発達文化学類 支援室
Mail：ningen@adb.fukushima-u.ac.jp
Tel：024-548-8103